

北垣先生と教育工学

白鷗大学教育学部長／教授

赤堀 侃司

北垣先生と知り合ったのは、ずいぶんと古い。先生が、まだ東京工業大学の工学部の助手をされていた時だったと思う。教育工学という研究分野は、まだ海のものとも山のものとも分からない、異端の研究分野だったから、この研究をしているだけで正統派でない印象を誰もが持っていた。そんな時代だった。北垣先生と教育工学の出会いは、たぶん末武国広先生だと思う。末武先生が、電子情報通信学会に教育工学の研究会を設立されて、助手だった北垣先生が、教育工学の研究をされたのではないかと想像している。

当時、教育工学で学位は出せなかった。現在では、教育工学の論文で、工学や学術の学位を、博士課程を持っている大学では出すことができる。それは、教育工学が学問として認められているからであるが、当時は、電子工学や情報工学の研究室から電子情報通信学会誌や情報処理学会などの論文誌に掲載して、学位を出す仕組みであった。だから、北垣先生が教育工学で工学博士の学位を助手の時代に取得されたのは、画期的なことであった。日本では、両手の指で数えるくらいしか、いなかった。その分、かなり苦勞されたのではないと思う。

北垣先生の得意な研究スタイルは、数理的に教育事象を解析したり、組み立てたりすることだったと思う。難解な数理モデルを駆使して、学習のグループ分けを分析して評価するシステムの発表を記憶している。北垣先生が助手になった時は、私は高等学校の教員だった時で数年後に東京学芸大学に移ったが、研究会などで一緒だった。私は、その後東京学芸大学から東京工業大学に移ったが、北垣先生はまだ東京工業大学におられたと思う。その後、職場を移られて、現在の広島大学に奉職されたが、その間、出版の関係でお世話になった。

私が編集代表で出版した「大学授業の技法」で、北垣先生に執筆を御願ひした。大学授業の工夫を紹介する内容で、実践的な内容であったが、先生にはいくつかの授業事例を執筆していただいた。北垣先生が広島大学に移られて、「大学力」の出版を有本先生と一緒に編集代表で刊行された。その時は、私が執筆を依頼された。日頃、難しい理論的な研究や論文をイメージしていたので、彼のしゃれた文章に驚いた、と同時に感心した。

その後、彼が学会の大会や研究会などで、ユーモアに関する研究を発表したことがあった。ユーモアの分類を試行し、何故面白いかを分析した研究であったが、それはきわめてユニークであった。何故面白いかを分析すると、それは面白くないというのが、通例である。ところが、彼の場合は違っていた。東京工業大学の私の研究室に、韓国出身の女性の留学生がいた。彼女が、研究会だったか大会だったか忘れたが、今回の発表で最も面白かったのは、北垣先生のユーモア、おかしみに関する研究だったと、文字通りおかしそうに大笑いしながら、私に話してくれたことがあった。あの研究の続きがあれば、是非発表を聞きに行きたいと、まるで北垣先生のファンのような表情をしたの

を、今でも覚えている。私は直接に聞かなかったので、そのおかしさがわからなかったのも、発表原稿を読んでみたが、どこが面白いのか、正直わからなかった。彼のユーモアの研究は、国際的なのかも知れない。

その後、北垣先生から電話があつて、「科学技術時代の教育」を一緒に編集代表で出版しないかという申し込みがあつたが、私はとまどい、断つた。何故なら、この本の執筆者には、先に述べた末武先生や坂元昂先生など、そうそうたる重鎮の先生方がいて、とても私達の若輩では、恐れ多いという感覚があつたからである。この頃、彼は何か執筆とか出版とか、見通しや自信があつたように見受けられた。人生の後半にかかつてきて、教育に対する情熱を持っていたからであろう。その意味で、広島大学で、彼は大学の仕事に生き甲斐を持ったのではないかと、想像している。いずれにしても、私は、北垣・赤堀の順で、編集代表になることを承諾した。その後、彼の熱心な編集作業によって出版できたが、遅れがちになる執筆者に、彼は丁寧ではあるが、きちんと催促していたので、その責任感に感心した思い出がある。

彼には、隠れた才能があり、音楽に対して優れた感性があつた。確か、姉妹に音楽の専門家がいると聞いたことがあつた。彼が音楽について語つたことがある。音楽には何の知識もない私が知っている曲は、演歌くらいなので、話が合わないだろうと思つていたら、「自分が尊敬するのは、美空ひばりだ」と言つたのには、驚いた。研究発表と同じくらい、難解な解説があるかと思つたら、美空ひばりとは、わかりやすい。特に、「川の流れるように」は、名曲だと言い、ひばりの古い流行歌もよく知つていた。それは、彼の数理的な研究の中に、ユーモアの研究が何の前触れもなく紛れ込んでいるかのように、しかもそれが存在感を持っていて韓国の留学生を魅了するような輝きを持っているように、美空ひばりの流行歌は、彼の内面からまぶしい光を放つようなメッセージを私に送つた。

誰でも、心に残る思い出の曲がある。その曲を聴くと、当時の思い出がよみがえる。人は誰でも他人に語つて聞かせたい曲や物語を持っている。北垣先生は、教育工学について、いつまでも語つていたいのではないだろうか。思えば、君の専門は何かと言われて、「教育工学です」と応えるのが気恥ずかしい時代から、今日では市民権を得て多くの研究者が堂々と応える時代になった。まさに、川の流れるように、知らない間に子供から成人になっていたのだと思う。北垣先生と私は、その良き高度成長時代に、職を得て研究できたことが幸せだったと思う。一度、初期の教育工学に賛同して研究をしてきた仲間が集まつて、これまでの思い出を語り合いたいと思う。その仲間は、同志と呼ぶにふさわしいが、みんなで語り尽くしたい。お互いがそのような年齢に達したのだと思う。その時には、北垣先生の「川の流れるように」を拝聴したい。

北垣先生、広島大学のご退職、おめでとう。第二の人生も期待している。